

図に基いて記載された。それ故 Kaempfer の図と文から判断して、それぞれオオイタビ、ヤブツバキ、サルトリイバラに同定され、それらの学名として一般に用いられている。一方ロンドンのリンネ腊葉庫にはリンネ自身によつて同定された標本が現存するが、それらは意外にもイヌビワ、オトメツバキ及びカラスキバサンキライ属の一種であつた。しかしこれらの標本は原記載と矛盾する性質を持ち、従つて基準標本と見なすことはできず、これらの種は所謂 book species として Kaempfer の書に基いて解釈し今迄通りの意味で使用したい。

○ 樹木雑記 (杉本順一) Junichi SUGIMOTO: Notes on the trees and shrubs of Japan

1. **ヒメマルバウツギ** (新称) 筆者は昭和 13 年 5 月 26 日駿河国安倍郡梅島村に於てウツギ属の 1 種を採集して比較した所、良くヒメウツギとマルバウツギとの中間の形質を有し、両者の間種と考察した。静岡市の大村敏朗氏は本年 (昭和 30 年) 4 月 25 日三河国新城町に於て同様のものを採集して筆者に提供下さつた。其の学名は既に **Deutzia candelabrum** Rehd. の名があつて、其の記載と一致するので、之を用いることとし、和名は新にヒメマルバウツギと定める。三種の比較は:

E. gracilis Sieb. et Zucc. ヒメウツギ 二年枝は灰色、葉は皆緑色の短柄あり、葉質厚く、基部は鋭形又は鈍形、鋸齒は平伏する、星毛は極めて乏少、5-8 岐す。萼には平伏星毛を粗生する。花糸に鋭鋸齒あり。

D. candelabrum Rehd. ヒメマルバウツギ 二年枝は淡褐色、花序下の葉は緑色の極微かの柄あり。葉質はやや薄く、基部は円形で、鋸齒は平伏する、星毛はやや密生し、4-6 岐する。萼には平伏星毛を密生する。花糸は鋸齒有無混生す。

D. Sieboldiana var. *Dippeliana* C. K. Schn. マルバウツギ 二年枝は赤褐色、花序下の葉は全く無柄で基部は凹形、花なき枝の葉は褐色の短柄あり。葉質はやや厚く細脈が著しい、鋸齒は内曲する、星毛は密生し、3-4 岐する。花序には斜出毛を交へる、萼には斜立星毛を密布する。花糸は鋸齒を欠く。

2. **ケナシアイツシモツケ** 静岡県立韮山高等学校教官羽田昶氏は昭和 27 年 6 月 7 日伊豆半島の北西部の鷲頭山でシモツケ属の 1 種の果季の標本を採集して筆者に送られた。翌年 4 月 4 日再び花季の標本を採つて送られ、同年秋に現地を案内下さつて自生を確かめた所、日本に多い有毛のアイツシモツケに似て、全体無毛で、葉は広卵を呈し基部は截形である。北村博士の鑑定を頂いた所、ケナシアイツシモツケ (キタシモツケ) **Spiraea Chamaedrifolia** L. であつて、本品は東亜大陸に多く産し、日本では初めてのものの如くであるから、茲に北村博士及び羽田氏に代つて報告する。伊豆の如き暖地の低い所に自生があることは分布上注目すべきと思う。

3. **ハコネコメツツジ** 本種は葯の裂開口の形だけで *Rhododendron* ツツジ属から分けて *Tsusiohyllum* ハコネコメツツジ属を建てて久しく踏襲されて来たが、筆者は大いに疑念を持ち、コメツツジに極めて近縁のもので、之より変成したもので、ツツジ属中の異端種にすぎぬと考えた。静岡生物同好会通信 4 号 (1952 年 5 月) で *Rhododendron Tsusiohyllum* Sugimoto の組合せを用意して仮発表した。其後大井博士の日本植物誌 (1953) を見ると、属を合併するのは同様なるも其の学名を *Rhododendron Tanakae*

(Maxim.) Ohwi と改められた。併し台湾の本属で其より早く *R. Tanakai* Hayata (アリサンシヤクナゲ) と云う 1 字違いの先行名があるので、茲に筆者の用意した学名を提唱する。

Rhododendron Tsusiophyllum Sugimoto, nom. nov.—*Tsusiophyllum Tanakae* Maxim., Rhod. As. Or. 12, t. 3, f. 1-8 (1870)—*Rhododendron Tanakae* (Maxim.) Ohwi, Flora of Japan (1953) 889, in Bull. Sci. Mus. Tokyo. XXXIII (1953) 81; non *R. Tanakai* Hayata, Ic. Pl. Form. IV (1954) 15.

○ **Andreaea petrophila** の出典 (水島うらら) Urara MIZUSHIMA: The original source of *Andreaea petrophila*.

Andreaea petrophila Ehrhardt は発表年代が Hedwig の Species Muscorum (1801) 以前である為に此の学名は命名規約上用いられず、*A. rupestris* Hedwig を用いねばならない。然るに *A. petrophila* Ehrh. の名はしばしば異名として引用されて来たにも不拘、其の出典に関して不明な点があつた。例えば最も重要な文献の一として不可欠な A. J. Sharp in Grout, Moss Flora of North America I (1936) には Hedwig の学名を正名とし、異名として *A. petrophila* Ehrh., Beitr. 1: 192 (1787) を引いているし、Brotherus, Die Laubmoose Fennoscandias 3 (1923) には Hann. Mag. 1778: 1601 と出ている。一方 Paris, Index Muscorum ed. 2, 1: 40 (1904) では Hann. Mag. 1784: 140 となつている。以上の重要文献 3 例が皆違つた出典を記しているのでは假令それが命名規約上使えぬ名であつても看過すべきではないと考える。よつて此の疑問を Tennessee 大学の Sharp 博士に質したところ、同氏より New York 植物園の H. W. Rickett 博士に照会されて次のような回答を得た。Ehrhardt は Hannöverisches Magazin 16: 1601 (1778) に属の発表のみに止め、含まれる種は後考に期すとした。次に同誌 22: 140 (1784) に *A. petrophila* を記載を附けて発表し *Muscus alpinus* Michaux を異名に入れた。3 回目 Beitr. 1: 180, 192 (1787) で更に充実した記文と共に属及び種を再発表している。即ち Ehrhardt は *A. petrophila* という名を 2 回記載を附して発表したことになる。どころが不思議なことに Britton & Emerson in North American Flora 15 (1913) では 1784 年の発表は hyponym と見做して棄て、1787 年の方を有効出版年代に採つている。然し此の見解は Rickett 博士も言われるように不可解であり、技術的に Hann. Mag. 22: 140 (1784) は不備ではなく十分 *A. petrophila* の原典と見ることが出来ると思う。故に上に例示した文献の中では Paris の引用が正当なものとなる。

The original source of *Andreaea petrophila* Ehrh., although the name should be a synonym of *A. rupestris* Hedw. nomenclaturally, has been cited at last three ways by various authors. Through the courtesy of Dr. A. J. Sharp of the University of Tennessee and Dr. H. W. Rickett of the New York Botanical Garden, I could settle the question. The genus *Andreaea* was published in Hann. Mag. 16: 1601 (1778) without accompanying species (Ehrhardt promised to give the specific name in a later communication). The species *A. petrophila* was published in Hann. Mag. 22: 140 (1784) with description, and *Muscus alpinus* Mich. was given as a synonym. Both genus and species were republished in Ehrhardt's Beitr. 1: 180, 192 respectively in 1787 with fuller descriptions. Thus *A. petrophila* was published two times in 1784 and 1787. Britton and Emerson regarded the earlier publications as "hyponym" and cited the later as the actual valid publication in the North American Flora 15 (1913). I can hardly accept their verdict, as Dr Rickett says, since Hann. Mag. 22: 140 (1784) would seem to satisfy technical requirements of nomenclature.

(東京都府中市 [])